

# ことばと人間の自由

——その束縛の危険性——

池 田 広 昭

Disadvantage Accompanying Language

Hiroaki IKEDA

## Abstract

Language has enabled man to enjoy more freedom than other animals. However, the very same freedom has caused man a lot of new miseries from which animals are entirely free. The disadvantage of language might be observed from three different viewpoints: first, language is basically a product of the past; second, it exists independently of the outside reality; third, language as a means of communication presupposes shared experience of its speakers. To be aware of the disadvantage would be a necessary step toward our release from it.

人間の特権とも言えることばは人間に恩恵のみを与えるものなのであろうか。人間になんらかの束縛を与えていないであらうか。人間の自由という角度からことばというものを再検討してみる必要はないであらうか。

ことばは、確かに、人間に動物には味わうことのできない大きな自由を与えている。ことばによりコミュニケーションが可能となり、知識の蓄積が行われるようになったし、これに伴い文化も生まれた。ことばはさらに人間に抽象化能力、論理思考能力、判断力などを与え、創造活動や未来の予測を可能にしている。しかし、とかく自由と危険とは背中合せであり、特に自由を受け入れ充分に使いこなす力のない時はなおさらで、ことばは人間に自由をもたらすと同時に動物にはない新たな危険を生み出しているようである。これはちょうど電気や原子力の発明に似ている。電気の発明により人間生活は以前に比べて飛躍的に自由度を増した。が、それと同時にいままでにない、感電、停電、漏電による火災といったトラブルや事故が新たに生じた。原子力の場合にはもっと極端であり、そのもたらすであろう人間の自由の可能性と人類絶滅の危険性とが表裏一体となっている。電気も原子力もその原理を

良く知り、その利用法を間違えさえしなければ非常に有用なものである。ことばも同様の性格を持つと言える。したがって、その本質や性格を知り使用法を誤らないのが危険を避ける道となるであらう。ここでは主としてことばの持つマイナス面に焦点を絞り、ことばがどのようなかたちで人間の自由を束縛するのか考えてみることにする。

両刃の刃とも言ふべきことばの危険性（ということとはとりもなおさず有用性でもある）を三つの観点から考えてみる。まず第一に、ことばが本質的に過去のものであるという点。第二に、ことばは現実そのものではないという点。そして第三に、伝達の道具としてのことばはそれを使う人々の共有経験をその基盤としている点である。これら三者は互いに独立した事柄ではなく、互いに密接な関連を持っている。

人間は生まれ落ちた時に自分でことばを作り出すのではなく、社会制度としてのことば、すなわち母国語を学ぶことを余儀なくされる。音声・音韻、形態素、語彙、統語法の体系といったものを、ある意味では、押し付けられるのであり、それを個人の意志で変更することは極めて難しい。その意味では過去によって支配されるのであり一種の束縛と言える。ソシュールはことばのこの面をラングと呼んでいる。

過去から受け継いだ制度としてのことばを論ずる時

によく「語る主体」というようなことが言われるが、語より下位のレベル、すなわち音声・音韻、形態素、あるいは活用で代表されるような文法規則のレベルにおける語る主体の自由度は極めて低い。日本語というものを母国語とする限り（いまは方言の違いを考慮に入れずに話をすすめる）、普通には、「鉛筆」は「え・ん・び・つ」という音を用いざるを得ない。また、「きれい」という表現は後ろに「鉛筆」が来る時は「きれいな（鉛筆）」となり、「鉛筆は」に続けて「けずった」で終らせる時には「（鉛筆は）きれいに（けずった）」という形になる。こういった規則的なことは母国語に従わざるを得ないし、語彙にしても、母国語にすでに存在している語彙を用いなければならない。音声・音韻や文法規則にも多少の自由があることは認めなければならないが、コミュニケーションを目的とした場合には語る主体がそれらの規則を勝手に変えることは許されない。こういったレベルにおける意識的操作の幅が非常に狭いということは、これらのレベルにおける語る主体の自由度の低さを示している。

語より上のレベル、すなわち語と語の配列以上のレベルになると、語る主体の自由度は次第に増してくる。ただし、語と語の配列にも各々の母国語に特有の共起制限、あるいは慣用句、シンタックスといったものがあり、制度からの制約を完全に免れることはできない。語、句、文という順で配列の仕方の自由度が増し、文学に代表される創造創作活動の余地が生ずる。これは語る主体の自由の典型的な現れと言えるであろう。

しかし、語の配列以上のレベル、すなわち句、文、文章、思考、思想といったレベルにおいて果して本当に人間は自由だと言えるのか考えてみる必要はないであろうか。

ここで誤解を避けるために、「英語が自由に話せる。」というような時に使う「自由」といまここで問題にしている「自由」とは違うということを指摘しておく必要があるであろう。「英語が自由に話せる。」という時は、一般には英語の音声・音韻、文法、統語規則に慣れた、つまり習得した、あるいは語彙を覚えたとすることを意味する。英語という一種の制度を覚え、それによってコミュニケーションができるということを表わしている。つまり英語の運用が能率的になったということを表わしているのであって、英語という制度からの自由を言っているのではない。車の運転技術の習得と同じように、英語の運用に関する条件付けが完成したという意味で「英語が自由に話せる。」と言ってい

るわけである。いくら「自由に」英語が話せると言っても英語の音声・音韻、文法、語彙の体系を思いのままに変更できる「自由」を得たわけではない。原理的にはバヴロフの犬と同様の手順で成立した条件付けの結果得られる「自由」は「能率」と呼ぶことにし、いまここで問題にしている制度や束縛からの「自由」とは区別しておきたい。

理論的には語の配列以上のレベルにおいて人間は極めて高い自由を持っていると言えるであろう。その意味で過去からの束縛を免れているはずであるが、実際に我々の置かれている状況をよく観察してみると、そうとも言い切れない面のあることに気付く。

家庭、社会、民族、国家、宗教といった本質的に過去なるものが人間をどのように左右しているか、そしてその時にことばがいかに重要な役割りを果しているかを考えるとき、人間の自由がいかに単なる母国語の音声・音韻、文法規則においてだけでなく、もっと上のレベルにおいても束縛を受けているかということに思いが及ぶのである。

家庭、学校、社会においてなされる教育は言うまでもなく大部分はことばでなされるのである。その教育の内容は一步譲ったとしてもほとんどは過去のことであり、残念ながら原理的にはバヴロフの犬と同じような条件付けがなされるのである。それによって家庭や社会のルールあるいは制度が教えられ、共同体内で摩擦を起こさず円滑にくらせるようにするわけである。制度そのものは多くの人間がいっしょに生きて行く上で必要なものであるからその存在の是非を問うべき性質のものではないが、自分がその中にいる制度だけが正しいという気持ちを持ち、他の制度に対して心を閉ざしてしまう、そして自分の教えられた制度から抜け出せなくなるという状況は問題なしとしない。これは悪い意味での条件付けと考えられる。

風俗習慣、道德倫理といったものは社会、文化によって大きく違うことが知られているが、これはとりもなおさず、それらが、良くも悪くも、文、文章、思想のレベルでの条件付けの産物に他ならないことを如実に物語っている。「あれをしてはいけない。」「これをしてはいけない。」「こうしなさい。」「あししなさい。」「共産主義をゆるすな。」「自由主義をのさばらせるな。」「宗教はアヘンだ。」といった具合に文以上のレベルでの巨大な条件付けがなされる。こうして我々は、日本に生まれれば日本人となり、インドに生まれればインド人となる。生まれたところが共産主義なら共産主義に、ヒ

ンドゥー教ならヒンドゥー教に、イスラム教ならイスラム教に染まる。そして条件付けの犠牲となって互いに対立する。子供は生まれた時は何国人でも、何主義でも、何教徒でもない。だが、生きて行く必要性から知らず知らずのうちに社会に条件付けを許してしまう。大人になった時はそこを抜け出してもいいはずであるが、条件付けはいったん成立してしまうと無意識だということの性格上、国や主義とほとんど完全に同一化してしまっており、それを抜け出すことは不可能に近くなっている。文学といえども思想や道徳レベルでの条件付けから抜け切ることはかなり難しい状況に置かれているのではあるまいか。

これと関連することであるが、ことばによりなされる思考は本質的に過去から抜け出すことができない。人間は自分の思考の独創性を信じる傾向がある。しかし、ことばによる思考に本当に独創的と言えるものはあるのであろうか。よく反省してみると我々の頭の中に浮かぶのはいつかどこかで見たり、聞いたり、読んだりしたものがほとんどである。そして頭に浮かんだ考えに対して良いとか悪いとか下す判断も、よく観察すると、小供の頃からの条件付けからくることに気付く。もちろん、一人一人の人間は生まれた環境や体験をそれぞれ異にするはずだし、見たり、聞いたり、読んだりすることも少しずつ違うであろう。したがって結果的に人間の頭に浮かぶことは一人一人皆違うと言えるであろう。しかし、これはただ単に違っているというだけで、人間が過去から自由になっていることを意味しない。よく注意していると、他人の言ったり、書いたりしたことがいつの間にか他人の考えであることをやめ自分の考えになってしまっている場合の多いことに気付く。最初は他人の考えという意識で他人の言うことを聞く。その証拠に多くの場合その考えに批判的態度を示す。ところが、後で気付くと批判的だったはずの他人の意見を自分の意見として言っていることがある。その最初は他人の意見であり自分も批判的であったはずの意見を第三者に批判されると気分を害す場合さえある。ここではすでに他人の考えが自分の考えになってしまっているのである。よく自分の意見を批判していた人が、後にまさにその意見をその人自身の意見として言っているのを発見することがある。私たちは、これは誰々から聞いた考え、誰の本で読んだ意見というふうにいちいち標識を付けるわけではないのでついこういう事態になる。ここにも過去に束縛される人間の姿の一側面がみられる。

パスカルは『パンセ』のどこかで、論文や著者に自分一人の署名をするのはうそをつくことになる、自分一人の考えだと思って実は過去のもろもろの人たちの言ったことの寄せ集めに過ぎないからだという旨のことを言っている。人間の思考が過去に支配されている様を適確に指摘していると言えないであろうか。今ここに書いている文章もその例に漏れないことは言うまでもない。人間の思考の大半を占めることばによる思考がいかに過去そのものであり、いかに過去に依存しているかは、学者たち(に限ったわけではないが)の書く過去の産物的論文や著作に、確かにパスカルの言うように、その一端をうかがうことができる。実際に引用以外はほとんど何も書いてない論文や著書も数多いからである。そういうことを奨励する教育がなされているようであるからそうなるのも避けられないのであろうが、不必要なまでに過剰な引用は過去や現在の著名人により自分の考えに権威付けをし、同時に、攻撃された時に責任回避をするための手段であると思えない。その例を今ここに自から示しているのであるが。

ことばを介した記憶により知識が生ずる。人間の心の知的な面はことばという信号よりなるコンピューターに譬えることができるであろう。その性質は過去の蓄積だということである。したがって、新しいことは知識によっては何も生み出されないと言える。新しいことはことばによる思考が消えている時にインスピレーションとしてひらめく。自分自身で判断、発見する能力を養うという理想とは裏腹に、実際に現在学校で教えられていることで本に書いていないことがどれ程あるであろうか。ことばによる思考はコンピューターの空回りのようなもので、創造性もなければ自由もなく、過去の繰り返しに過ぎないと言いうことができるであろう。

知識のもうひとつの側面はそれが直接体験に代わるというところにある。他人の体験したことをことばを使った二次的伝達により自分の知識とすることができ。ここで単なる知識と実際の体験を混同するという現象が起きる。これはことばが実物そのものでないということと関連している。

現実時は時々刻々と変化を続けている。しかし、ことばは過去のものであるため今この瞬間の状態を追い切れない。新しい事態を示すことばがない場合もあるし、たとえあったとしても、ことばで言い表わした時は現実はずで先に進んでしまっている。

この辺で視点を過去なるものとしてのことばから非実体的なものとしてのことばに移す。

まず、「みず」という音声あるいは音韻(これからは繁雑さを避けるため単に「音」ということにする。)が水そのものでないことは明らかである。それでは「水」という意味を表わすのは「みず」という音である必然性があるかと言うとそうとは言えない。現在では変更しにくくなっているが、場合によってはまったく別の音であってもよかったはずである。この意味で本質的に音(表現)と意味との間に必然的な関係はないと言える<sup>1)</sup>。ソシュールがこのことをシニフィアン(言語表現)とシニフィエ(意味内容)との関係の恣意性と言っているのはよく知られている。しかし、これもまたソシュールの理論のうちであるが、人間が生まれた時に学び始める母国語という観点からみれば、「みず」という音は「水」という意味を表わす約束になっておりその関係を勝手にくずすことはできない。本質的には恣意的である(ということは人間に自由があることになる)音と意味との関係もいったん制度として成立してしまうと対応関係全体を受け入れざるを得ない(ということは人間が過去によって束縛される)という必然性が生ずる。ここにことばの持つ矛盾性、二面性といったものがうかがえる。

「みず」という音は水そのものではないと言う時、「みず」という音は自然界の水を指し示めているのだという考え方がその裏に予想される。ここにおいてことばの本質にかかわる問題が提起される。すなわち、ことばはア・プリオリにことばの外に実体として存在する自然物や概念に対する名前なのかどうかという問題である。外界に水という他と区別された、それだけで独立して存在する実体があって、それを日本語では「みず」、英語では“water”というふうに、各個別言語によって異なる名前を付けているだけなのかということが問われる。もし、ことばがことばの外に存在する実体に対する名前だとする(こういう考え方を丸山圭三郎にならって「言語名称目録説」<sup>2)</sup>と呼ぶことにする)なら、「水」という意味を日本語では「みず」、英語では“water”という音で表わすという言い方が許されることになる。そして先に言及した音と意味との本質的恣意性に関して、「水」という意味は日本語では「みず」、英語では“water”という音で表わされるから音と意味との関係は恣意的だという以前によくみられた説明が可能となる。しかし、ごく大ざっぱな物の言い方をする時は別として、こういう説明の仕方は正確

ではない。というのは、日本語の「水」ということは英語の“water”ということばとその意味の領域を異にするからである。日常用法において、英語の“water”は日本語の「水」と「(お)湯」とを合せた意味領域を有する。したがって、「水」という意味を日本語では「みず」と言い、英語では“water”と言うという言い方は不正確である。これに類する例は他にいくらでもあるわけで単純にことばは外界に存在するものに対する名前だと言い切れない面があるのである。したがって、音と意味の間の恣意性は二言語以上に渡って語ることが許されない。「みず」という語と“water”という語は単に音が違うだけでなくその意味も違うからである。

このような事実から、ことばはことばの外の世界に実体として存在するものに対する名前だという考え方は不利な立場に立たされ、かわって、ことばが外界に区分を与えるのであり、意味があらかじめありそれに対して音があとから割り当てられるのではなく、音と意味との関係は人間が外界を区分する時に同時に成立する、つまり音なしの意味、意味なしの音もあり得ないのだという考え方が有力になる。

ソシュールのシーニュの理論がこの後者に属することは周知の事実である。ソシュールはミニフィアン(ここでは便宜上「音」と言っている)とシニフィエ(ここでは「意味」と言っている)の本質的には恣意的であるが制度としては必然的である不可分離のまとまりをシーニュと呼び、シーニュの価値はことばの外の世界の何かの実体から必然的に生ずるのではなく、あくまでもシーニュ間の差違の束、対立、相対関係として生ずるものであり恣意的であるという理解の仕方をしている。言い換えると、シーニュはことばの外の世界とは独立して存在し、シーニュそれ自体の相互関係のうちに生ずる価値というかたちで外界を分節する。したがってその分節の仕方はことばの側の都合であり、言語外の実体に依存するものではないということになるであろう<sup>3)</sup>。このソシュールの理論には傾聴すべき点があると思う。

このあたりの議論は『般若経』類やナーガールジュナの『中論』に代表される種々の論書、唯識派の論書、『老子』、『莊子』などの東洋の宗教の經典にみられる記述との類似性がみられる。丸山圭三郎も空の論理とソシュールの思想の類似性を、簡単にではあるが、何回かの機会に指摘している。しかし、ここではその類似性を指摘しておくにとどめる。

古くからの言語名称目録説を否定することによりソーシャルは自然界の側にあったことばに対する主導権を人間の側にとりもどす。これは人間が事物の世界から支配を受けているという図式を消して見せたことになり、自然界に対する隷属から人間を解き放ちその自由を示すことになる。ただし、この自由は昔最初にことばを作ったであろう人たちだけのものであり、現代においては新語を作る機会に恵まれた人たちにだけ楽しむことが許される自由である。ことばを作る機会に恵れなかった現代人の大部分は過去からの重荷を負わされこのような自由を味わう機会はないのである。

もし自然界にア・プリオリに区分があるとするとその区分に対する名前をとりかえることはできてもその区分を変えることはできない。この場合ことばは不自由で必然的なものとなるであろう。しかし、実際にはそうではないという考え方はソーシャルの理論にそった考え方だと思うが、ソーシャルのようにシーニュの自然界の切り取り方の恣意性を強調し過ぎるのは適当でないように思う。確かに恣意性を表わす例は枚挙にいとまがないくらいあるが、ことばが自然界に影響されているという面も見逃すことはできないと思う。それは異なった個別言語の間で意外に自然界の区切り方が似ているという点にみられる。まがりなりにも異言語間の翻訳が可能なのは言語(母国語)が異なっているにもかかわらず自然界や精神界の区切り方が重なりあっている部分が多いということを示していると言ってよいであろう。もちろん完全に一致することはないが相違点のみ強調し過ぎるのは真実から離れているように見える。もし自然界の区切り方が完全に恣意的だったとしたら各個別言語による自然界の区切り方が我々の想像を絶するほど違っていてもよいはずである。しかし、そうっていない。たいていどこの国のことばにも山があり、谷があり、空があり、雨が降り、風が吹く。また、その地方の自然界に存在しないものに対しては語彙がなく、存在しているものに対しては語彙がある。このことはことばが自然界に依存している面を表わすと考えられる。外界がかわればことばもかわる。だが、ことばがかわっても外界はかわらないであろう。ことばは外界と完全に独立して存在しているのではなく、すなわち完全に恣意的なのではなく、かといって完全に依存しているわけでもないという半独立半依存の中途半端な性格を有している。したがって、理論的にはすっきりしなくなるが、ことばと自然界との関係の恣意性を断定せず少し弾力をもたせたほうがよいように思わ

れる。

ことばと外界の関係は眠っている時にみる夢と起きている時の現実との関係に似ている。夢は現実ではない。夢は現実から独立して存在している。しかし、夢の内容はかなり程度(というのはそうでない場合もあると言われているからであるが)、普通に目覚めている時の現実から影響を受けている。現実での欲求の未充足の部分が夢において主として絵のかたちで充足されるからである。夢は現実ではなく現実と100%の必然性を持ってつながってはいないが夢の内容は現実依存している。これと同様、ことばは外界のあるがままの反映ではなくそれと一応独立して存在している。しかし、ことばは外界にかなり影響を受けている。語の価値はことばの側が決定するのではあるが、ことばによる外界の区分の仕方には外界の影響が大きく現われる。

夢の内容は現実には直接影響を与えない。それと同様、ことばは外界のあり方に直接影響を与えない。ことばによる外界の区分の仕方変っても外界は変わらない。ここに、言い換えれば、依存の方向性がみられる。したがってことばが外界に対して持つ自由はプロジェクトの仕方の自由である<sup>4)</sup>。

言語名称目録説をとるとらないにかかわらずことばと人間と自然界の関係は動かし難い事実としてそこに存在する。どの説をとるにしても人間の直面している事態には変りはない。事実は理論の外に存在するからである。しかし、どの説がより適確に事実を把握しているかは問うことができる。ことばと外界の一方通行的関係と理論と事実との一方通行的関係とは同じである。

各国語を比較した時、「水」と「water」のように一見同じ概念を表わしているような例が実は別々の概念を表わしているという例はいくらでもある。このことはもちろん、ことばの側が外界を区切るのだということの根拠になる。ただし、その区分の恣意性も完全なものでないことは先に検討した通りである。

「長い・短い」、「暑い・寒い」、「明るい・暗い」、「高い・低い」、「速い・遅い」など物理界に対応する絶対的な実体があるわけではなく、人間の側から相対的に設定した区分に関してはことばの意味領域の恣意性を謳う理論のほうが便利である。これらよりもっと抽象度の高い「美・醜」、「善・悪」、「生・死」、「苦・楽」といった語については差異、対立、相対性の観点からことばをとらえる立場からでないといふと説明しにくい。



ことば(語)の意味が相対的なものであるということ、ことばの分類区分的性格、そしてそれともなう抽象性と一般性は不可分離の関係にあり、ことばの二元論的性格を生み出している。あるものをAと呼ぶことは、裏でA以外のものを想定していることを意味する。少なくともそういうとらえ方が普通は暗黙のうちになされている。これはAであるものはAでないものではありえないというアリストテレス的論理学の性格を有する。そしてそれに伴う排他的性格を有す。善、悪というものは相対的にのみ価値が決まるものである。両者は絶対的な実体を持たずその区分線は実際にはないはずである。しかし、現実問題としてはそのことが忘れられ、善悪の区分が極めてはっきりしているかのような錯覚を起こし、善に絶対的価値を見出し悪を排そうとする。実際にはひとつのものを神とか悪魔とかいろいろなものに分け、それが別々の実体を持つかのように思い込み、そのうちの一方のみをとろうとし、その実際にはないものを追求め、争ったり人を批判したりする。こういった見方に道徳とか倫理といったものは依存している。善であるものは悪ではあり得ないと考え、好きなものはきらいではあり得ないと思い込み、イエス・オア・ノーの二極分離的排他性に陥る。

これに関してはタオイストたちに傾聴すべき点がある。彼らの説くところでは、この世はすべて二極分離の原理により成り立っている。それによって動きが可能となっているのである。しかし、二極は互いに他を排し合うのではなくあい補う関係にある。冷い水を排除しようとする暖い水までなくなってしまうように、二極の一方のみを排除しようすると両方排除することになる。本来同じものだからである。このことを認識しないために人間は迷いの世界に住するのだというのがタオイストたちの教えるところである。

ことばの持つ二極分化的二元論の性格はデジタル・コンピューターの原理と同じである。ことばのもつ相対性が二元論を生むわけであるが、それはことばの持つ相対性を認識し忘れてからである。

ことばが実物そのものでないという性格は語以下のレベルで論じられることが多いが、それより上のレベルでより一層大きなかわりを人間に対して持っているように思われる。

ことばが実物そのものでないおかげで人間は時間的にも空間的にも離れているところの様子を現場にいくとも知ることができるようになった。また、因果関

係を理解したり、論理思考や推論をしたりすることが可能になり、それによって未来の予測が可能になった。コミュニケーションと知識の蓄積、科学や文化といったものは皆ことばのこういった非実体的性格の産物である。こうして科学的な真理は誰か一人が発見すればもう他の人が必要が生じるたびに発見しなおす必要がなくなった。

ことばが実物そのものでなく自然界の束縛をかなり免れているという性格はこのようなプラスの面を持つと同時にことばの独り歩き現象とも言えるマイナスの面を持つ。人間は眠っている時は絵で夢を見、起きている時はことばで夢を見る。そのようなことがマイナス面として起きている。この幻のようなことばの世界のことをヒンドゥー教や仏教ではマヤと呼んでいる。自然界や事実の世界を離れ虚構の世界を作り出すことが可能になったので、人間はうそをつくことができるようになった。人間以外のものには不可能なことである。ことばが自然界と密着していたとすれば恐らくうそをつくことは不可能である。

ことばは現実や事実の伝達という機能を離れ、ことばだけの空想の世界、うその世界、論理の世界を作り出す機能を持つにいたった。そればかりかある場合には現実や事実、真実を覆い隠すはたらきをさえするにいたっている。ことばが現実を指し示す機能には非常に制限がある。だが、ことばが実際には存在しないのを存在しているかのように思い込ませ、そういうものだけから成り立つ世界を作り出したりする機能は無限である。ことばが人間に与えてくれる自由の持つ危険性がこういったところにみられるわけである。ナーガールジュナはことばのこのはたらきをブラバンチャ(漢訳は「戯論」)と呼んでいる。

ブラバンチャの典型的なものはいわゆる哲学やイデオロギーである。真理、神、人類愛、正義、主義、国家、民族、家族といった実際には触れることもできないような実体のないものを好んで論じ、そのために戦争をしたり生命を賭けたりする。ソシュールの理論も、ナーガールジュナの言説も、今ここに書いている文章も皆ブラバンチャと言わざるを得ない。

ブラバンチャの本質はよく光を見たことのない盲人に譬えられる。盲人が光のことを誰かから聞いて、それに関して様々な知識を集め、いろいろな推論をし、その性質や存在に関して種々の議論をする。目の見える人を相手に光は存在しないという議論をするかも知れない。この盲人が光に関して持つ知識はすべて間接的

なもので自分自身の直接体験ではない。したがっていくら立派な議論を展開し得たとしても、それは空理空論に過ぎず、光を見るのに役立たないし、光をすることのできる人には愚かに見える。また、自分には知覚できないから光は存在しないという信念を持ったとしても、その信念はただ単に盲人の無明を示すのみである。これと同じように、現実、事実、真実を体験として知っている人はブラバンチャの無駄を知り、ブラバンチャを弄しない。ブラバンチャをしたり信念を持ったりするということは自分の無知を示すだけである。この盲人のすべきことは議論をしたり信念を持ったりすることではなく、良い医者を見付け目が見えるようにすることである。議論や信念への固執はしばしばそれを妨げる。知識の危険性はここにある。

人間の心はいろいろな問題に関して、それが現実の問題であろうとことばによる架空の問題であろうと、解答を欲しがらる。いかなる解答でもよい、答えは自分が知っているような気持ちになることを許し満足感を与えてくれる。そしてその答えはしばしば非常に馬鹿馬鹿しいロジックによってバックアップされている。人は自分が知らないという事実には耐えることができない。そこで答えを作り上げそれが真実らしく見えるように愚かなロジックをも創造し、知らない者が知っている振りをする。

ことばによる理屈の世界に没頭することは自分が今、現に置かれている状況から目をそらして見えなくするはたらきがある。自分が現在かかえているいろいろな問題、怒り、欲望、憎しみなどに煙幕を張り、注意を神だとか愛だとか形而上学的な、役に立たないけれど高尚そうな方面に向ける。あるいは、人類のために社会体制を変えとか、他人に奉仕するとかいうことばにより自分自身の存在の根本にかかわる問題と直面することからのがれる。ことばは醜い自分からのがれることを、少なくともそのような幻想を、可能にする。いくらブラバンチャの世界に逃げ込んでも、その人の現実には常にその人を大きな力をもって動かしている。

屁理屈、正当化ということもことばが真実を隠すひとつの例である。普段私たちが使うことばは真実を伝えるより真実を隠すために使われるほうが圧倒的に多い。たわいのない屁理屈から非常にもっともらしい理論や議論にいたるまでいろいろな程度の正当化が日常生活や政治の世界にはびこっている。自分の醜く、野蛮な実状を知られないために、本音をさぐられないた

めに、ことばが大活躍をする。結論はロジックより先にあるのだが、いかにもロジックが先のような言い方をしてその結果を正当化する。そしてことばを操るのがうまい者ほど社会において大きな力を与えられるという状況になっている。

ことばによる虚構の世界はエゴを生み出している。デカルトの「コギト・エルゴ・スム」という命題はエゴのことを意味しているのではないのではあろうが、思考があるからこそエゴがあるのだという観点から見ることにも可能である。エゴの非実体性は仏教や禅を始めとしてすべての宗教の説くところであるが、語の意味の相対性とよく似ている。他の人と違うところを寄せ集めてエゴが成り立っているからである。語において差異の束が語に実体的な錯覚を与えるという図式と等しい。このエゴの差異の束は大部分ことばでできている。したがって、ことばと同様、実体を持たず過去だけから成り立っている。

ことばを伝達という観点からみると、それが複数の人間の物理的及び精神的経験の共通部分に依存していることが浮び上ってくる。これはことばが過去の産物であるという点と重なる部分である。過去に存在し、かつ、共有部分に存在するものでない限り、ことばで言い表わしたり伝達したりすることはできない。過去あるいは共有部分からはみ出す領域はことばの力の及ばないところである。ことばは現実を分類区分、抽象、一般化することにより現実に解釈を提示している。したがって、仮にその分類区分の仕方と違う、あるいは一切分類しない別の認識に達した場合、それを正確に伝えることばがないということになる。また、ことばは抽象的であるため、具体的な事実や微妙な違いを明確に示すことが難しい。

誰でも経験することであるが、自分の思うことがうまくことばで言えないことがある。自分の見聞きしたこと、自分の気持ち、なかでも特に自分の感情を表現することばが見付からないことがよくある。論理思考にはことばは便利なのであるが、自然界のこまかい描写、自分の感情の表現といった、より現実的、具体的、実存的なことに関してはかなり無力である。これはことばが人々の経験の共有部分に依存し、また、分類的性格からくる抽象的性格を有することの帰結である。

このような日常的経験から容易に、人間の認識する領域においてはことばがすべてではなく、ことばでとらえられないし、表現もできない領域のあることが知られる。ただし、このことと人間の意識外の世界があ

るかどうかということは別問題である。

人間は自然界、宇宙の一部分として存在するのであり、そのまた人間の一部分でしかないことばによる論理思考によって宇宙の真理を極めることはとうてい無理な話であろう。ロジックは単純な事実には勝てないし、ロジックに合う合わないにかかわらず事実は事実である。ロジックのほうから事実と合わせるしかない。また、理論というのは定義的性格を必ず持ち、そのため排他的な性格を持つ。AはBだと言った時、これにあてはまらないものを排除してしまう。実際は、AはBであり、同時に、AはBではないのかも知れない。

宗教経験の世界においてはことばは最も無力である。人々の共有経験の領域外の世界だからである。同じ経験をした人たちにとっては『ウパニシャッド』のように「それ」でも「あれ」でも間に合うが、経験のない人たちには何と言っても伝わらない。ちょうど光を見たことのない盲人のようなものである。

世界各地の各種の宗教、神秘主義はその方法やドグマにおいては千差万別であるが、ことばと宗教的、究極的真理の関係に関しては見解が一致している。その代表は『無門関』第六則「世尊拈花」という公案や、『維摩経』の「維摩の一黙」、『ヨハネの福音書』におけるキリストの沈黙である。

真理はことばを超えておりことばによっては伝えることができない、その上、ことばは真理を得る妨げとなる。したがって經典には真理はないというのが世界の覚者と呼ばれる人たちの一致して説くところである。真理を得るのにことばによるブラパンチャが妨げとなる様は『中阿含経』ニニー「箭喩教」の「毒矢の譬え」によく説明されている。真理は今、ここにあるのであり、ことばは、そのことばがいかなるものであろうと、今、ここから遊離している。ことばは絶え間なく人間を現実から引き離し、架空の世界に引きずり込む。ちょうど曇りガラスが太陽の光を遮ぎるように、湖面のさざ波が水面に映る景色を乱すように、鏡のちりがそこに映る像を覆うように、ことばは真理を妨げる。真理はことばを含む心作用が止滅したときに現出する、というのが覚者と言われる人たちの説くところである。

真理はことばでは伝えられないということもことばで伝えなければならぬというジレンマに老子、ブッダを始めとする覚者たちは直面しなければならなかった。これに関しては禅に「月を指し示す指にかみつくな。」という譬えがある。真理を指し示す手段にとらわ

れるなということである。あえて説くのは弟子をおもう心からということであろう<sup>5)</sup>。

車を持たない人は車に対する不満を述べることができない。ことばを持たなければことばに対する批判をすることはできない。その意味で、ことばに関するマイナス面が論じられるということは人間にとってはしあわせなことである。少なくともことばを持っているのだから。だが、よりよい状態を望むのは人の常、なんとかことばのために生ずるマイナス面を改善することはできないであろうか。そのためにはマイナス面をよく知る必要がある。ソシュールの言語論はその目的にかなり合う。しかし、その議論は主として語より下位のレベルを対象としているだけであるし、ことばの束縛から抜け出すことは彼の主たる関心事ではなかったようである。少し物足りない。その物足りなさは神秘主義の方法論で補うことができる。人間はことばに対して自由であり得るかという問いに対して神秘家たち(ブッダ、老子、莊子、バタンジャリ等々)は、一回ことばを超えた世界に行って来たものだけがことばに対して主人であり得る、そうでないものは常にことばに使われると答えている。分析をするだけでは自由になれないらしい。

これに関連して次のような話を思い出す。

インドのある村で一人の男が毒蛇にかまれた。たまたまその村には『ヴェーダ』や『ウパニシャッド』に通じた有名なバンディットが住んでいた。人々は男をそのバンディットのところに運んで行った。どんな蛇にかまれたのかと聞くとバンディットは、その蛇はその辺では珍しい蛇でシヴァの化身と呼ばれることがあり、普通はもっと気温の高い、湿っぽい地方に棲息している、この辺でみられたのは実に珍しいと言った。そして毒蛇の毒は歯の根本の毒袋にあり、その毒には人間の血の中に入って呼吸困難を引き起こす性質のものと、肉を腐敗させる性質のものとあるが、この蛇の毒は呼吸困難を引き起こす性質のものだと説明した。その上、かまれて三時間くらいのうちにはほとんどの人が死んでしまうと付け加えた。人々はどのような治療をするのかと息をこらしていたが、バンディットは一向に手当てをしてくれる様子がない。そこで誰かがどうしてはやく治療してくれないのかと尋ねると、彼はすまして、私は治療のできる医者とは皆知っているが、私自身は治療はできないと答えた。蛇にかまれてからすでにかなり時間が経っていたので村人たちはあわてて、医者 の居場所を尋ねた。運の良いことに、二つ程



先の村に一人いるというので、村人たちは医者のもとへと走った。医者はどんな蛇にかまれたのか訊くと急いで草叢に入って行き、しばらくして一匹の長い蛇を素手でつかまえて出てきた。その蛇を持って医者は村人たちと蛇にかまれた男のもとへ走り、着くといきなり持ってきた蛇に男の傷口をかませた。村人たちは驚いたが男はどうにか回復した。あとで村人たちに医者が言ったところでは、治療に使った蛇自体も毒蛇で、かんだ蛇の毒を中和するはたらきがあるということだった。バンディットにもこのことは話したことがあるから彼も知っているはずだが、彼にはその蛇がつかまえられるのだということも付け加えていた。

ことばについて知っていることがことばから抜け出すことのできない人とことばを使ってことばをとり除くことのできる人。理論と実践。分析と応用。あとは沈黙に語ってもらうことにしよう。

(本稿は本学における学術共同研究「現代諸学の問題」の活動の一環として発表するものである。)

## 注

- 1) 擬声語や擬体語は音と意味の恣意性が多少弱まる部分である。特に擬声語はそうで、動物や虫の鳴き声や物音などを模倣しようという意図を持つものであるから、「コケコッコー」が「チュンチュン」でもなんでもよかったと言ったり言い過ぎである。ここに音と意味とのある程度の必然性を認める必要性が生ずる。「ある程度」と言っているのは完全な模倣と違い、擬声語というものも母国語の体系に組み込まれている限り、母国語の音声・音韻体系の制約の中で音を選ばざるを得ず、その選択に恣意性が生ずるからである。
- 2) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』(岩波書店、1982年) 116 ページ以降を参照。
- 3) 同書 116 ページ以降に引用されているソシュールの新しく発見された手稿や学生の講義録を参考に筆者がまとめたものである。
- 4) ことばが自然界に対して一切直接的かつ物理的

影響を持たないと断定することはできないようである。神秘主義の立場からいろいろな可能性が提起されているからである。

- 5) 『般若心経』や『金剛般若経』などの『般若経』典類やその他の經典類を哲学書、つまり真理が書いてある書物とみなすのは危険である。『般若経』及びそれと類似のナーガールジュナの空の論理、否定の論理を一般性のある哲学と考えるのは真実をとらえていない見方であるらしい。特に『般若経』は修行の初心者を読むべき經典ではなく(昔は口伝であるからそのようなことは起こり得なかった)、ある段階に達した修行者に対する注意書きのようなもので、したがって修行とは無縁の哲学者の読むべきものではなく、読むととかく害がありがちだと言われている。

## 参考文献

- ソシュール著、小林英夫訳『一般言語学講義』1972年、岩波書店。
- 丸山圭三郎著『ソシュールの思想』1982年、岩波書店。
- 丸山圭三郎著『ソシュールを読む』1983年、岩波書店。
- 増谷文雄著『阿含經典による仏教の根本聖典』1983年、大蔵出版。
- 長尾雅人編集『大乘仏典』(世界の名著 2) 1978年、中央公論社。
- 東京大学仏教青年会編『現代人の仏教聖典』1982年、大蔵出版。
- 小川環樹編集『老子 莊子』(世界の名著 4) 1975年、中央公論社。
- 梶山雄一著『空の思想 仏教における言葉と沈黙』1984年、人文書院。
- 横山紘一著『唯識思想入門』(レグルス文庫 66) 1982年、第三文明社。
- 梶山雄一、上山春平共著『空の論理 中観』(仏教の思想 3) 1984年、角川書店。
- 中村元著『ナーガールジュナ』(人類の知的遺産 13) 1983年、講談社。
- 服部四郎、沢田允茂、田島節夫共編『言語』(岩波講座哲学 XI) 1968年、岩波書店。